飯田再発見 2

在京飯田高校同窓会定時総会～講演

飯田の自然とそこに育まれた文化
～飯田の茶道と猿庫（さるくら）の泉のことなど

西澤良斉（高35回）

●にしざわ・よしなり
飯田市出身。医師。（財）中部公衆医学研究所理事長、（医）龍川会西澤病院院長、長野県環境測定分析協会理事。趣味は茶道、観世流能楽。武者小路千家家元後嗣隨縁斎直門となる。流儀を超え飯田の茶道文化の保持に努める。

猿庫の泉と茶の湯と和菓子と

飯田市において茶道が盛んであることは、それに携わる人にしか案外知られていないことかもしれませんが、飯田下伊那には多くの茶道教室が在り、この地域の茶道愛好人口は２００名以上とも言われます。

飯田における茶道の歴史は古く、江戸時代から飯田の旧家では、皆でお金を出して京都に若者を派遣し、一種の「茶道留学」のようなことをさせていました。そこで習得された茶道を持ち帰り、またそこから皆で学ぶというようなことをしていたそうです。飯田にはそのような長い茶道の歴史があり、今でも月に１回茶会が開かれています。それが戦後も60年以上の長きにわたって続いており、また、毎月の茶会にはいつも１００名以上の茶道を愛好する人達が参加しますが、そのような伝統があるのも全国的に見ても数少ない、茶道に熱心な土地柄と言われます。

そして、その中心になっているのが、風越山麓の湧き水である「猿庫の泉」です。

元々猿庫の泉は、江戸時代の三河の茶人であった不蔵庵龍渓（ふぞうあんりゅうけい）宗匠が茶の湯に適した水を求めて天龍川を遡り、源泉にまでたどり着いて発見したという逸

猿庫の泉の元にて　野点の様子

話があります。今でも飯田の茶会では泉の水が用いられていますし、江戸時代の記録によると、飯田城主も泉を保護し、家来達に馬を駆けさせて泉より水を汲んで来させて、その水でお茶を点てていたという逸話も残っています。

泉の水は軟水で、昭和60年には環境省より「現代の名水百選」にも選ばれました。当方の検査機関で毎年水質検査を行っておりますが、今も充分に飲水に適合した水質であることが証明されています。

泉は「猿庫の泉保存会」という有志によるボランティア活動により守られており、週末には、泉の源泉に水を汲みに来る市民の姿も多く見られます。また、春から秋の日曜祝日には、茶道の関係者が泉の元に出向いて、水を汲みに来る人達に、野点でお茶を点てて振る舞っています。

茶の湯が発達したのと同時に付随したものとして、飯田においては和菓子も発達しました。現在でも飯田には多くの和菓子の店舗があり、様々に意匠を凝らした和菓子が季節ごとに作られています。私は飯田の和菓子は京都などに比べても遜色ない素晴らしい和菓子だと思っていますし、裏千家の家元に献上したところ、これは美味しいお菓子だと褒めてくださって、家元主催の茶会でも、わざわざ飯田から取り寄せて使われたこともあったと伝え聞きます。

毎月、猿庫の泉の水を中心とした茶会が長きにわたり続いているのも、飯田における茶道文化を長く支え、泉を守ってきた先人達の強い思いがなければ、出来なかったことと思います。

能楽文化と水石（すいせき）文化

また、茶道だけではありません。飯田は伝統的に能楽を愛好してきた土地柄でした。観世流の同好会である観水会という能楽の会が結成されてから今では六十余年になりますし、それ以前の昭和初期頃から、わざわざ能楽師を招聘して、本格的な能楽を学んでいた歴史がありました。私が子どもの頃には、能における声楽である謡を嗜む人は飯田にもたくさんいました。葬儀の場では故人を送るに相応しい謡が披露されることもあり、そんな光景も私自身、子どもの頃の記憶ですが覚えています。

昭和初期頃、招聘した能楽師を囲む当時の謡曲会の人々

観世流において現在も広く使われている謡の教科書である『謡本（うたいぼん）』を、自筆で昭和初期に書いたのも飯田出身の人であった、ということがわかっています。平成2年には観世流の家元が自ら当地にいらして能を披露されたこともありました。そのようなところにも飯田と能楽の古くからの深い関わりが伺い知れます。

その他、飯田は自然石を愛好する「水石文化」の中心でもありました。自然石を景色に見立てる「水石」も実は古くからの日本の伝統文化のひとつです。山から石が転がり運ばれる過程で天龍川によって削られた石が、その中に美を感じるように自然に造形されました。そのような自然石が多く産出されたことで、おそらく飯田は水石文化の中心となったのだろうと思われます。しかし今では水石を知っている人も少なくなってしまいました。

水石文化のように、今では失われつつあるものもありますが、茶道など、現在でも古くから変わらずにずっと続いている文化が飯田にはあります。

飯田の自然と文化遺産を継承して

その他にも、お練りまつりや山間部に伝わる霜月祭も有名ですし、古くから続く人形劇フェスティバルの元となった黒田人形など、昔からの文化遺産が実は飯田下伊那にはたくさんあります。

これから近い将来、リニア新幹線開通により、おそらく飯田市はより人口も増えて、今よりも、もっと大きな地方都市になってゆくことでしょう。東京など都市部と直結した、便利な街になってゆくと思われます。しかし、ただ人口が増え、大きくなってゆくだけでは、他とは何も変わらない、ありきたりの地方都市になるだけです。飯田が飯田らしさを保ちつつ、他との差別化が出来る街であり続けるためには、飯田の先人達がずっとこの地で守ってきた自然を今後も守り、またその中で育まれてきた歴史や文化的な背景を我々が再認識して継承してゆかなくてはなりません。そこに、飯田ならではのまちづくりの形があるのではないかと思います。

飯田下伊那を離れた在京同窓会の皆様にも、次に里帰りされた折には、ぜひ一度、猿庫の泉を訪ねていただきたいと思います。今も昔と変わらず、泉には滾々（こんこん）と水が溢れています。